

だから職員が辞めていく ダメな施設を選ばないために 18

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-09-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 岡田, 耕一郎, 岡田, 浩子 メールアドレス: 所属:
URL	https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/230

だから職員が辞めていく



18

ダメな施設を選ばないために

猫の目行政という言葉がある。これは、猫のひとつが周りの明るさによって形が変わることから、行政の打ち出す制度が頻繁に変化することを皮肉った言葉である。厚生労働省（厚生省）も役所なので、伝統的に猫の目行政を実践してきた。

「趣味の介護を個人の立場で提供する」という奇妙な理屈がまかり通っているのである。さて、このような奇妙な世界は「養の河原」を思い起させる。親に先立って死んだ子どもが「一つ積んでは父のため、一つ積んでは母のため」と言いながら、親の供養のために石を積んで塔を作ると、どこからか鬼がやってきて、その塔を壊し、子どもが塔を作るたびに鬼が壊すという繰り返し。子どもたちの努力は報われることはないが、最終的に地藏菩薩によって救われるという話だ。

「鬼」とは「管理職」であり、石を積んでいく「子ども」とは現場の「介護職員」である。石を積むとは、その施設の介護のノウハウを蓄積することであり、石を崩すとは、せっかく積み上げたノウハウなどを捨て去ることである。

現場の職員に身近なところでは、天井走行式リフトであり、回廊式廊下であり、現在のユニットケアもその有力な候補である。これらの斬新すぎる試みは、一部の有識者や役人などの思い付きで始められ、現場の職員に反対されて方向転換されたものである。ところが、介護現場の関係者は、このような行政の猫の目ぶりを批判するもの、実は自分たちも同じようなこと（猫の目介護）をやっていることに気づいていない。今回は、この「猫の目介護」の問題を取り上げることにしよう。

「〇〇のリーダー論」に惑わされるな

ここに勉強熱心な新米管理職がいるとしよう。管理職として、何をどうやらなければならないのかわからないので、ベテランの介護職にいろいろ聞いたり、研修に出たり、業界の知り合いに相談したりする。そして、最終的に自分がやりたい介護を目指そうという結論にたどり着く。

これが深刻な問題点である。たまに見かける『〇〇のリーダー論』のような軽いハウツー本を読むところを書いてある。「どんなケアをしたのかを自分に問う」という項目があり、「やりたいケアか、やりたくないケアか?」の観点から、今までのケアを洗い直してみよう。リーダーになれば、『やりたいケア』をやりとおせる権限がある」と書いてある。

この理屈をもとに一つのケースを想定し、老人ホームという組織を比較的時間の流れの中でどう直してみよう。新たに管理職になったAさんは、これまでの施設の伝統であった介護が気に入らない（やりたくない）のでやめてしまいが、自分は排世介助に興味があるので排世介助を重点的に力を入れ始めたが、3年ほど管理職をやった後、結婚退職してしまっ

この問題は『〇〇のリーダー論』を書いている著者がわかしいという言い方もあるかもしれないが、そうではなく著者は介護業界の常識の代弁者にすぎない。介護業界では伝統的にこのような「自分の理想とする介護を実践する」方式が良しとされてきたのだ。そこには、組織として介護サー

介護現場は、実は日本中の老人ホームがそうなのかもしれないが、仮免練習中のような管理職であふれている。それまでヒラの介護職員であったのが、ある日突然、上の人と呼ばれて、管理職（介護主任、介護チ

「理想の介護」の罪深き実態

新米管理職は、『〇〇のリーダー論』を読んでは介護現場を養の河原にするので、もはや前途有望な専門職が成長するための場とは言えなくなってしまう。常識があるのが悲しい。常識のある介護職員にとっては、多くの老人ホームはひどく居心地の悪い場所になってしまっ

チェックポイント ⑬ 「猫の目介護」

「猫の目」の傾向が見られる。多くの老人ホームでは、多くの介護職員にとっては、多くの老人ホームはひどく居心地の悪い場所になってしまっ